



国学院大学

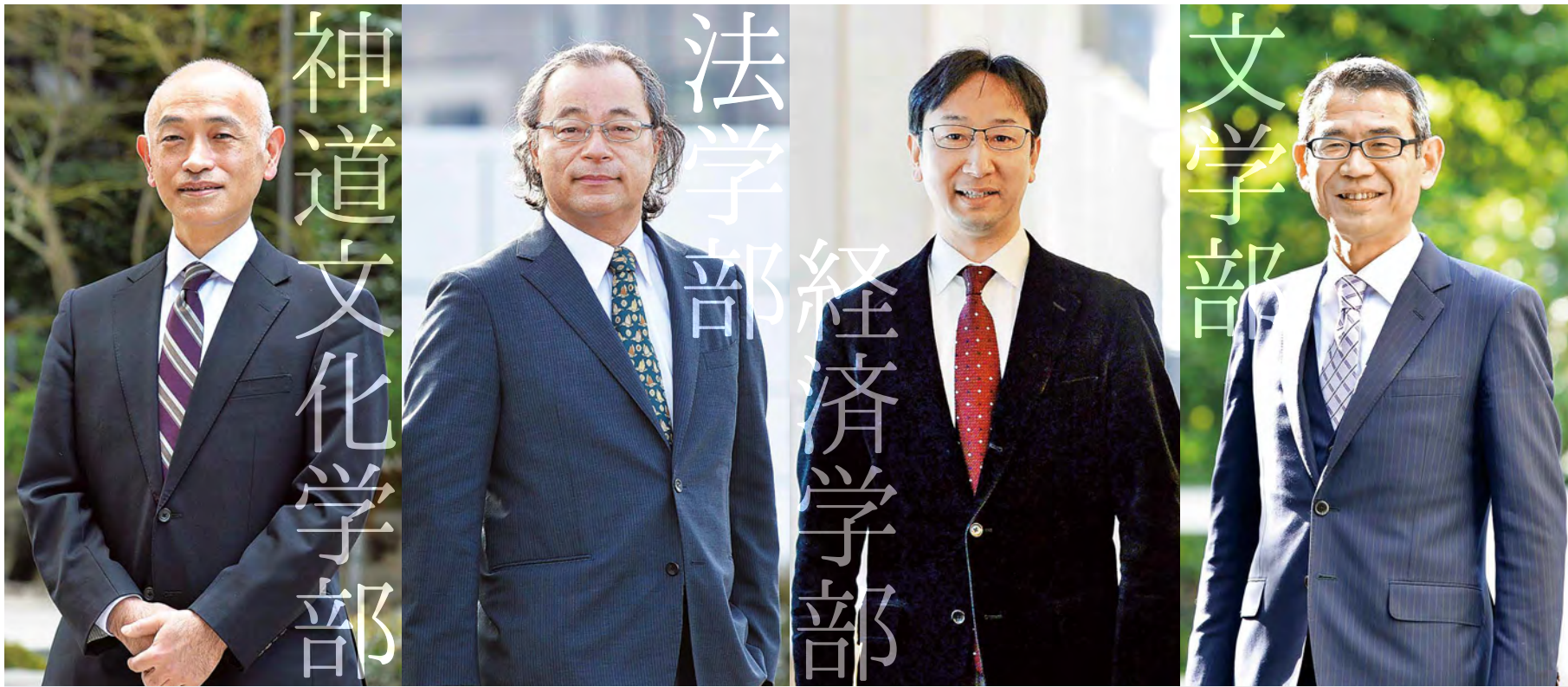
令和5年5月20日(出) 定期号(毎月20日発行) 1部20円

〔発行〕国学院大学 〔編集〕総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 〔電話〕03(5466)0130 〔FAX〕03(5466)0528

祭 儀

■ 月次祭

6月1日(木) 午前10時 神殿

学部
学長に聞くそれぞれの学部が
目指す未来①

国学院大学では、4月より2期目を迎えた針本正行学長のもと、新体制がスタートした。社会変化が進む中、6学部の学部長はどのような思いで学部の運営にあたるのか。5月号では、文学部・経済学部・法学部・神道文化学部の4学部長に、目指す研究・教育の未来について聞いた。

文学部・矢部健太郎学部長は「文学部は地味かもしれない。だが、ここには本物の学問がある」と力を込める。人間の最大の個性である「言語によるコミュニケーション」と「文字による記憶と伝承」を研究する同学部の学びは「人間の深奥に迫るもの」と語る。

経済学部・星野広和学部長は「So What? (そこから何が言えるのか)」を追究する人材の育成を掲げた。ゼミや課題解決型授業などで学びの専門性を強化しつつ、「人間性やコミュニケーション能力、人を動かす熱意などの総合力も涵養したい」と抱負を語る。

法学部・菊田真司学部長は「知識の先にある判断力を磨く」ことを大切にしたいと語る。アクティブ・ラーニングによる議論や対話を通じ、学生が価値観の多様性を経験する機会を重視。公正な解決の道筋を考え「対立を解決できる人材」を育成したいと述べた。

神道文化学部・黒崎浩行学部長は、「神道や日本文化を次世代へ伝承することが使命」と決意を表した。地域の衰退など神社を取り巻く厳しい現実を踏まえつつ、「何を守り、何を変えていくか」を見極め、「主体的に動ける人材となつてほしい」と学生へ期待を込めた。

4～7面に関連記事

神殿鎮座記念祭を斎行

神殿造替前最後の記念祭

学校法人国学院大学は、5月1日午前11時から渋谷キャンパス神殿で93回目となる神殿鎮座記念祭を、佐柳正三理事長、針本正行学長はじめ法人傘下諸学校の役教職員、学生らが参列して、厳かに斎行した。

祭典は、斎主・星野光樹神職奉斎員(神道文化学部准教授)、教職員の祭儀員、瑞玉学生会生が祭員として奉仕し、神道文化学部学生による浦安の舞も奉納された。

佐柳理事長は、祭典終了後に有栖川宮記念ホールで行われた直会のあいさつで、「今後、渋谷キャンパスには、明治神宮の鎮座百年祭記念営繕事業である本殿修復工事の際に造営された仮殿を頂戴し、新たな神殿を造営する。本学創立40周年の昭和5年に竣功した現在の神殿は今後、伝統



的建物保存の意義も付加し、たまプラーザキャンパスへの移築工事が開始される。現神殿での鎮座記念祭は今回が最後となるため、感慨もひとしおだ」と述べた。

みはるかすもの

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が5月8日、5類感染症に引き下げられた。厚生労働省や都道府県などによる感染者数発表も8日で終了。法律に基づく外出の自粛要請もなくなり、感染防止策も個人の判断となった▼5月の大型連休の出入は、各所でコロナ禍前の水準に戻りつつある結果だったようだ。

報道もあった。有名な観光地では、観光客によるごみのポイ捨てやマナー違反の路上駐車による交通支障が発生したり、山や河原にキャンピングカーやバイクの放置されたりといった具合だ▼フランスの小説家ギユスターヴ・フロベールは「旅は人に慎みを教えてくれる。世界のごく狭い場所できていると知るからだ」との言葉を残した。せっかく気兼ねなく出かけることができようになつたのだから、楽しむなかでも慎みは忘れず、マナーは守って羽を伸ばしたい▼あわせて注意しなければいけないのは、新型コロナウイルスが無くなったわけでも、ウイルスの性質が変わったわけでもないということだ。人との交流もレジャーも健康あつてこそ。コロナに限らず、体調には気をつけて過ごしたい。



「多鈕細文鏡」の実物を掲げ講義する杉山名誉教授

令和5年度特別講座
「日本文化」テーマに開講

毎年、テーマを設けて実施している国学院大学「特別講座」の令和5年度第1回が4月19日、渋谷キャンパス総合学修館（6号館）で開講され、約60人が参加した。

今年度のテーマは「日本文化」。古来より周辺の国々からさまざまな文化が流入し、淘汰されながらも日本の文化に取り入れられてきた歴史的な背景を踏まえつつ、今日まで続く文化現象や鏡、剣など日本で重要視されてきたものを取り上げ、日本文化や日本人の文化的な特徴を探るというものの。杉山林継本学名誉教授がコーディネーターを務め、研究開発推進機構の大東敬明教授、深澤太郎教授、吉永博彰助教に加え、法相宗僧侶の有働智晃・本学兼任講師がそれぞれの観点から講座を担当するリレー形式で開催される。

第1回は「鏡」を題材に杉山名譽教授が担当した。杉山名譽教授は、洋の東西を問わず「鏡は真実を映すもの」として捉えられている」と語り出し、西洋の神話の例や中国の皇帝が自身に對し、他者が反逆の意思を持っているか否かの判断に用いた例を挙げた。現代

でも日本各地の神社で鏡が御霊代みたましろとして祀られていることなどに触れ、「日本ではさまざまな時代を通じて、信仰の対象となってきたことが特徴」と述べた。続いて、日本に住む人々が最も早く入手したた本に銅鏡と杉山名譽教授が推測する「多鈕細文鏡」を取り上げて解説。吉武高木遺跡（福岡県）の木棺墓などから発見例があるものの、列島全域での発見は12面あまりで「副葬品が多く発見された遺跡であっても青銅鏡はごく一部でしか見つかっていない」とその貴重性を示し、日本人にとって鏡が重要なものとして位置づけられてきたと語った。ほかにも、平原遺跡（福岡県）などで出土した「内行花文鏡」を例に中国からの文化的な影響にも触れ、「後漢の光武帝が好んだといわれる花の紋様が施されており、文化的な交流を見出すことができる」とし、杉山名譽教授が所有する実物を見せながら説明した。

受講生は、熱心にメモを取りつつ杉山名譽教授の話に耳を傾けていた。終了後には、青銅鏡を間近で見ることができる時間も設けられた。受講生が早速、講座で取り上げられた鏡の紋様を写真に収める様子や杉山名譽教授に質問を行い交流する様子が見受けられた。同講座は11月にかけて全10回にわたって開催される予定。

**小林達雄名誉教授
米芸術科学アカデミー会員に選出**

小林達雄・国学院大学名誉教授（博士〈歴史学〉）が4月19日、アメリカ芸術科学アカデミーの会員として選出された。選出分野は、「社会科学および行動科学」の人類学・考古学分野。小林名誉教授は、縄文文化研究の第一人者で、縄文土器の模様を縄文人の思考や精神性から捉えようとするなど独自の視点で研究に取り組んできた。

同アカデミーは1780年に創設された同国最古の学術組織で学術、芸術、政治など幅広い分野から会員が選出される。歴代会員にはノーベル賞受賞者をはじめ各分野の世界的な著名人が多数名を連ねており、会員への選出は名誉なこととされている。本学関係者からの選出は井上順孝名誉教授について2人目。

不審電話に注意を!!
関係者名乗り個人情報求める

本学の関係者を名乗り、学生本人や家族などの個人情報を聞き出そうとする不審な電話があったとの報告が寄せられている。

報告された事例は、いずれも「０５０」から始まるインターネット回線を利用したＩＰ電話の番号から発信されている。本学関係者を名乗り、「緊急連絡先の確認」「個人情報データの再登録」などの名目で電話番号や住所、家族構成、保証人勤務先などを聞き出そうとしている。

本学では通常、個人情報の確認のために学生本人や保証人（父母など）への電話は行っていない。不審な電話があった場合は、決して個人情報を伝えずに**下記**まで連絡・相談を。

▶学生生活課 ☎03・5466・0145
▶たまプラーザ事務課 ☎045・904・7714
▶大学院事務課 ☎03・5466・0142

第2回 Bloomingレクチャー 眞鍋氏「プラス思考が結果生む」



人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンターが主催する第2回 Blooming レクチャーが4月15日、対面とライブ配信のハイブリッド方式で開催され、約200人が参加した。このイベントは、「達人から学ぶ人間開発」をテーマに開催。女子バレーボール監督の眞鍋政義氏が「逆転発想の勝利学 チームのスイッチを入れる」と題し講演した。

はじめに富田一誠センタール長（人間開発学部教授）が「講演を通じて皆さんの背中を押してくれる言葉を感じ取ってほしい」とあいさつ。登壇した眞鍋氏は「監督就任後、チームが達成すべき目標の明確化と、情熱を持ち選手と接することを心がけた」と振り返った。また、自身のコーチ

ング哲学を「1つ目は『私はカリスマ指導者ではない』、2つ目は『監督はモチベーターである』、3つ目は『目標のためにやれることはすべてやる』の3点」と紹介した。モチベーション向上への監督の役割については「プラス思考の選手が成績を上げることとはデータ分析からも明らか。選手のタイプを見極め、試合前の会話を变える、日頃のわずかな変化にも声をかける、自身の失敗談も隠さず話すなど、監督が心を開き向き合うことで選手と関係を築くことが重要」と述べた。逆転、発想については、「就任時、非常識を常識に変えるほどの挑戦が必要と激励を受けた。バレーは相手コート内にボールを落とせば得点になる。ふと逆の発想が浮かび、日本のレシーブ力を強化し点を取ら

る。重圧のかかる場面を想定し、プラス思考で臨めるような練習で備えてほしい」と助言。学生からの「部員を怒るのが苦手」との質問には、「目標達成に何が必要かを一緒に考えることが大事」とアドバイス。「データと監督・選手の感覚などとのバランスのとおり方は」との質問には、眞鍋氏は「データは嘘をつかない。客観性や選手間の公平性を担保するために活用している」、渡辺准教授は「指導者や選手の卓越した感覚や経験は時にバイアスを生むことがある。その時にデータの客観性を生かしてほしい」と語った。

講演会終了後は、抽選で眞鍋氏のサインボールが当たるサプライズも用意され、当選者に眞鍋氏からボールが手渡された。写真右。最後に、ユーモラスで軽快なトークを繰り広げた眞鍋氏に、会場からは大きな拍手が送られた。



令和4年度指定寄付者一覧（敬称略）

令和4年10月1日～令和5年3月31日（単位：円）

寄付者	寄付目的	寄付金額	収納日
国学院大学院友会徳島県支部 支部長 後藤 立夫	教育・研究振興支援	20,000	令和4年10月 4日
国学院大学院友会和歌山県支部 支部長 瀬村 浩暉	学生・生徒等の奨学基金	30,000	令和4年10月 5日
柴野 悠樹	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和4年10月 7日
廣井 武司	学生・生徒等の活動支援（柔道部）	10,000,000	令和4年10月13日
みずほ証券株式会社 取締役社長 浜本 吉郎	学生・生徒等の奨学基金	1,500,000	令和4年10月14日
大倉 悌志郎	学生・生徒等の奨学基金	2,000,000	令和4年10月19日
大倉 陽子		1,000	令和4年10月24日
		1,000	令和4年11月22日
關橋 淳	課外活動支援（硬式野球部）	1,000	令和4年12月22日
		1,000	令和5年 1月23日
		1,000	令和5年 2月22日
		1,000	令和5年 3月23日
大村 秀司	施設・設備充実支援（創立140周年記念事業）	500,000	令和4年10月26日
	学生・生徒等の奨学基金	4,937	令和4年11月10日
杉山 道明	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部、陸上競技部）	20,000	令和4年10月28日
	施設・設備充実支援	20,000	令和4年10月28日
野村證券株式会社 本店法人営業二部長 李 庸行	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和4年10月28日
匿名	学生・生徒等の奨学基金	300,000	令和4年10月28日
匿名	学生・生徒等の奨学基金	500,000	令和4年11月 1日
千家 慶子	教育・研究振興支援（神道文化学部周年事業）	200,000	令和4年11月 2日
株式会社みずほ銀行 取締役頭取 加藤 勝彦	学生・生徒等の活動支援（創立140周年記念事業）	1,000,000	令和4年11月 4日
鹿島建設株式会社安全環境部 部長 本多 敦郎	教育・研究振興支援	100,000	令和4年11月 7日
土屋 紀生	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部、陸上競技部）	10,000	令和4年11月 8日
横山 隆	学生・生徒等の活動支援（駅伝応援）	10,000	令和4年11月10日
大和証券株式会社 代表取締役社長 中田 誠司	学生・生徒等の奨学基金	500,000	令和4年11月21日
伊藤 直記	課外活動支援（陸上競技部）	10,000	令和4年11月22日
直井 小百合	教育・研究振興支援	1,000	令和4年11月22日
渡邊 一彦	施設・設備充実支援	100,000	令和4年11月22日
匿名	学生・生徒等の活動支援	100,000	令和4年11月25日
坂口 吉一	学生・生徒等の活動支援	4,000,000	令和4年12月 2日
匿名	学生・生徒等の奨学基金	20,000	令和4年12月 6日
江場 仁彦	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和4年12月 7日
近藤 篤	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和4年12月 7日
高山 充	教育・研究振興支援	30,000	令和4年12月 7日
林 幸治	学生・生徒等の活動支援	10,000	令和4年12月 7日
矢澤 敏司	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和4年12月 9日
増渕 俊一	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和4年12月13日
金城 盛弘	学生・生徒等の奨学基金（国学院大学久我山高等学校女子部）	500,000	令和4年12月19日
西田 政二郎	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	5,000	令和4年12月20日
一般財団法人国学院大学院友会	学生・生徒等の活動支援（第26回高校生創作コンテスト）	100,000	令和4年12月21日
会長 吉田 茂穂	学生・生徒等の活動支援（第18回地域の伝承文化に学ぶコンテスト）	100,000	令和4年12月21日
平野 英輔	課外活動支援（マンドリンクラブ）	10,000	令和4年12月22日
黨 和夫	教育・研究振興支援	10,000	令和4年12月22日
	課外活動支援（陸上競技部）	5,000	令和4年12月22日
五島 洋	課外活動支援（モーターボート水上スキー部）	1,000,000	令和4年12月22日
高橋 一行	施設・設備充実支援	100,000	令和4年12月23日
株式会社KOJIMA SPORTS 代表取締役 小島 光顕	施設・設備充実支援（相模原グランド修繕費）	534,000	令和4年12月26日
飯田 邦幸	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和5年 1月12日
石井 啓隆	施設・設備充実支援	10,000	令和5年 1月12日
遠藤 洋之	学生・生徒等の奨学基金	30,000	令和5年 1月12日
新井 さきほ	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	10,000	令和5年 1月23日
遠藤 ゆき子	課外活動支援（陸上競技部）	10,000	令和5年 1月23日
河村 好章	学生・生徒等の活動支援（国学院大学久我山中学校）	50,000	令和5年 1月23日
馬田 茂喜	教育・研究振興支援	100,000	令和5年 1月23日
峯村 一幸	課外活動支援（陸上競技部）	10,000	令和5年 1月23日
相模原市大野台ソフトボール部 有志代表 佐藤 忠司	施設・設備充実支援	22,000	令和5年 1月30日
ローバースカウト隊 代表 西山 和範	学生・生徒等の活動支援	350,000	令和5年 2月14日
花澤 孝次	教育・研究振興支援（国学院大学久我山高等学校）	100,000	令和5年 2月15日
株式会社アルフ 代表取締役 實川 利光	学生・生徒等の奨学基金	60,000	令和5年 2月20日
岡崎 大輝	施設・設備充実支援	1,500	令和5年 2月22日
株式会社エデュース 代表取締役社長 松本 雄一郎	学生・生徒等の奨学基金	1,300,000	令和5年 2月22日
小林 静子	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	10,000	令和5年 2月27日
国学院大学院友研職会 会長 松山 文彦	教育・研究振興支援（研究開発推進センター学術研究資金・神道文化学部活動支援資金）	6,500,000	令和5年 3月20日
佐々木 綾子	学生・生徒等の奨学基金	200,000	令和5年 3月24日
東京都神社庁 庁長 小野 貴嗣	施設・設備充実支援（令和4年度神職養成の事務機器等購入費）	350,000	令和5年 3月27日
国学院大学院友経済会 会長 大塚 勤	学生・生徒等の活動支援（大規模災害被災学生支援）	100,000	令和5年 3月30日

「指定寄付金」のご芳名

学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広くご寄付を募っています。

令和4年10月から5年3月まで別表の通り、多方面の方々からご寄付をいただきました。ここにご芳名を掲載し、重ねて深甚の謝意を表します。

本法人に対する寄付は、専用用紙による申し込みとインターネット上でクレジットカード決済による申し込みが可能です。詳細は9面をご参照ください。

（総務部総務課）



植木直一郎

研究開発推進機構 准教授 渡邊卓

植木直一郎は、国学院大学教授・神社本庁参与などを務めた人物として知られる。植木の学問は、学位論文となった『御成敗式目研究』に象徴されるように日本法制史を中心にしながらも、その著作や論考は広範囲に及び、我が国の古典全般に通じていたと言っても過言ではない。

植木は、明治31（1898）年に本学本科を第6期生として卒業した。そのとき成績優秀により賞与を受け、卒業論文は「徳川氏の大名操縦策」であった。その後、東京府城北尋常中学校（後に府立第四中学校、現在の都立戸山高等学校）で教職に就く。同校は、21年9月に皇典講究所敷地内の一面に設立した補充中学校を前身としており、27年4月に東京府城北尋常中学校と改称したが、このときも皇典講究所敷地にあった。そのため、恩師たちとの交流は続いたようである。植木は教鞭を執りつつ32年1月には東京外国語学校別科（英語科）に入学（翌年7月まで在学）、翌年6月からは清国公使館の嘱託により館員に日本語を教授するようになった。

転機は明治36（1903）年であった。東京府立第四中学校を退職、清国公使館の日本語教授も辞して、10月に国学院大学研究科に入学し、再び母校に籍を置くこととなったのである。このとき国学院では、創立の当初に卒業した者が更に学ぶ研究科を設置していたが、第1期の卒業生を世に送った後は、経済的な理由から休講状態が続いていた。だが研究科の重要性和世間の要望も高かったため、皇典講究所は国学院を充実

学問ノ道

第51回

植木直一郎の学問

国学院第2号の文学博士

して所謂大学と同一程度的高等教育機関とするため、36年9月の新学年より研究科を再開するに決し、同年4月に研究科の規定を改めて文部省の認可を得た時であった。植木は、恩師の畠山健の勧めもあり第1期生として入学した。同研究科は本学の卒業生で、かつ成績優秀者を対象としており、授業料は免除され卒業生は「国学院学士」と称することができた。研究科は、国史法制・国語国文・道義の3科で、修業年限は2カ年であった。植木は、国史法制科に「日本法制史（特に武家時代）」の研究題目を提出し入学している。このときから植木は日本法制を研究対象としていたのである。

植木は明治39年3月に研究科を卒業、翌40年4月に皇典講究所講師、9月に国学院大学講師となった。42年には皇典講究所にて開設された内務大臣委託の神職養成部講師、大正9（1920）年には国学院大学教授となった。

その間の大正3年1月に、植木は東京帝国大学名誉教授・穂積陳重の懇望により、同氏の研究並びに著述公刊の補助を嘱託され、15年に穂積没後遺著遺稿の整理出版に取り組んだ。この経験において、植木は穂積が長年にわたって蒐集してきた『御成敗式目』の刊本写本1050冊の研究を委嘱され、この研究が後に『御成敗式目研究』（昭和5（1930）年、岩波書店）として刊行された。これが植木の学位請求論文となり、翌6年に文学博士の学位を取得したのであった。植木の学位取得は、大正12（1923）年の三矢重松以来のことであり、国学院大学第2号の文学博士となった。

植木の学問は、皇典講究所・国学院の学風に根ざしたものであり、戦後に本所・本学の関係が法律的に解消されるまで、長らく本学の学問を牽引したのであった。

何世代も前から 受け継がれる学問

文学部の研究は「人間はど
う生きていくのが良いのか」
「人間とはどういう存在なの
か」という根本的な問いを突
き詰めることにほかならな
い。そして人間の最大の個性
は、言語によるコミュニケーション
と、文字による記憶と
伝承だ。それを研究する私た
ちの学問は、人間の深奥に迫
ることになる。

加えてこれらの学問が、人
を動かす力やリーダーシップ
に役立つという認識も強まっ
ている。リーダーがチームの
士気を高めたいとき、哲学や
思想は有効になる。また、自
分の判断に説得力を持たせた
いなら、過去の経緯やデータ

文学部

Faculty of Letters

令和5年度から2
期目に突入した文学
部の矢部健太郎学部
長。矢部学部長は
「本学部は『地味』
かもしれないが、こ
こには本物の学問が
ある」と言い切る。

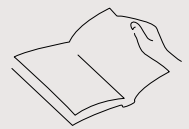
その上で、輩出した
い人材について「大
学での学びを身近な
人や社会に還元でき
る人」と表現する。
詳しく話を聞いた。

去の記録を調べ、考証を重ね
る中で、これまでの見識とは
違う歴史を生み出せる。ある
いは、今までの説を「確か」
だと実証できる。過去の歴史
上の人物は真実を語れない
が、本物の研究者はその人々
が残した記録をもとに、歴史
の代弁者になれる人だ。

本学部のイメージは、世間
的には「地味」かもしれない。
でもそれでいい。学問に
重きを置き、真面目に研究を
突き詰める学部だ。本物のス
キルは本物の学問からしか学
べない。

こういった研究を支えてい
るのが、長い歴史の中で本学
部が積み重ねてきた蓄積だ。
といっても、ただ長いから良
いということではない。重要
なのは、本学部の教員の中に
は、国学院大学出身者が多く
いることだ。私自身、本学部

地味だけど、
それでいい。
「本物の学問」が
ここにある



文学部長・矢部健太郎

学部 学長に 聞く

それぞれの学部が
目指す未来①

経済学部



Faculty of Economics

令和3年度から経
済学部を率いてきた
星野広和学部長。
星野学部長は「So
What? (そこから
何が言えるのか)」
の追究を大切にす
る人材を育成した
と考える。詳しい意
味を聞いた。

世の中に貢献する 「総合力」を備えた人材を

経済学部は、私が学部長に
就任する前年に学科再編を実
施し、同時にカリキュラム面
も変更になった。それまでゼ
ミの加入や卒業論文の提出は
任意であり、ゼミ加入者は6
割ほど、卒業論文の提出者は
4〜5割だったが、新カリキ
ュラムではゼミに所属しない
場合は卒業リポートの提出を
必修化した。どちらを選択す
るかは学生の自由だが、学部
では積極的にゼミ加入を勧め
てきた。

狙いは、先行研究を踏まえ
た研究に取り組む学生を増や
すとともに、学生が身につけ
る専門性を強化することだ。

これまでの学部生の就職状況
を見ると、就職率は9割を超
え、高い成果を残している
が、より本学部の学びを活か
し、それを強みにして社会で
活躍できる人材を増やしたい
と考えたからだ。

そういった専門性に加え、
教育面で本学部が目指すの
は、人間としての総合力の涵
養だ。総合力とは、人間性や
コミュニケーション能力、人
を動かす熱意などを指す。
日本の採用制度は多くが総
合職採用であり、入社後もゼ
ネラリストとしてさまざまな
職種・部門を経験するのが一
般的だ。たとえ専門性を身に
つけても、希望した職種に就

けるとは限らない。現実のキ
ャリア形態とのギャップが生
じる可能性がある。また、多
くの学生は、社会に出ると
「専門的な知識だけではどう
しても勝てないことがある」
と気づくこともある。だから
こそ総合力が重要になる。
本学部が育成したいのは
「だから何?」を常に問いか
け、答えの本質となる「そこ
から言えること」を抽出で
きる人材、つまり「So What?
(そこから何が言えるのか)」

「インプットなきアウトプット」 と向き合っていく

「総合力」を養うために、本
学部では毎年、1年次から企
業や行政、団体と連携した課
題解決型のプレゼンテーショ
ン大会を開催してきた。外部
組織から提示される「正解の
ない課題」に対し、グループに
分かれた学生が提案を行う。
また、それぞれのゼミが集
まった成果発表会を3年次に
行い、その場で教員の批判や
質問に学生が答えるなど、従
来の論文を書いて提出するだ
けでなく、コミュニケーション能
力を養う場を強化している。
真のコミュニケーション能
力を伸ばすには、緊張感のあ
る場で社会人と会話をするこ
とが必要だ。社会に出れば、
会話の至るところに交渉ごと
が含まれ、相手の深層心理を
引き出す、要求を承諾しても
らう技術も求められる。この
能力は学生同士の雑談ではな
かなか育まれない。

そのほか、一連のカリキュ
ラムでは、学生のアウトプッ
トだけでなく、その前提とな
るインプット、情報収集の力
を養うことにも力を入れている。

世の中に 貢献するための 「手段」を 学ぶ場所



経済学部長・星野広和

アウトプットの技術は場数
を踏めば一定程度備わるもの
だ。それ以上に身につけてほ
しいのは、目の前の情報をう
のみにせず精査する真のイン
プットだ。近年はデータサイ
エンスの重要性も増している
が、仮に2つの変数に相関関
係があったとして「相関があ
る」とすぐに受け入れるのは
本質ではない。その相関の裏
にどんな因果関係があるの
か。あるいは因果ではなく、
第3の要因で起きた相関なの
かを考えることも重要だ。

繰り返しになるが、情報を
集めて加工することが大学の
学びなのかという疑問を常に
もつ私にとって、現代の学生
に広がる「インプットなきア
ウトプット」を正していくこ
とが重要であり、議論や討論
を呼び起こすカリキュラムは
その一翼を担っている。

のだと考えている。一方で、
教員が全て本学出身者になる
のも望ましくない。学統を尊
重しつつ、適切に外部からの
学問だからこそ、誰かに還元を

教育面の展望としては、こ
こで学んだことを長く社会に
還元できる人材を輩出したい
と考えている。小説、絵画、
音楽、歴史、哲学、語学とい
った学問・芸術は、学ぶこと
で人生に面白みを与えるもの
ばかりだ。どれも私たちの身
近にあり、趣味になりやす
い。賞味期限が長く、何歳ま
でも楽しめる。しかも、こ
れらのジャンルが世の中から
途絶えることは考えにくい。

だからこそ本学部の出身者
は、ここで培った学問を誰か
に還元することで、人々の人
生を楽しくすることに貢献し
てほしい。子どもたちに本を
読み聞かせる、地域の歴史を
次世代に伝える、美術館・博
物館の展示や解説に協力す
る。いろいろな形があるだろ
う。職業としてはなくても
構わない。ボランティア活動
や老後の楽しみでも良い。小
さな範囲、身近な人で構わな



やべ・けんたろう
平成7年国学院大学文学部史学科卒業、16年同大
学院文学研究科博士課程後期修了。博士（歴史学）。
専門は戦国・織豊期の政治史、公武関係史。著書に
『豊田政権の支配秩序と朝廷』（吉川弘文館、2011
年）、『関白秀次の切腹』（KADOKAWA、2016年）など。

いから、自分が学んだ学問で
誰かの人生を豊かにしてほし
い。それが社会への還元にな
るのだ。

さらに他学部との連携も強
化したい。特に学問領域の近
い学部とは、一緒に作った取
り組みを積極的に行っていけ
ればと思っている。

例として、令和4年度に
開設した観光文化づくり学
部は、歴史や文脈に基づいた
象に含めるという点で共通項
がある。本学部は渋谷キャン
パス、観光まちづくり学部は
たまプラーザキャンパスと離
れているが、オンライン授業
を活用した取り組みも考えら
れる。大学だけでなく、国学
院大学北海道短期大学部や国
学院大学栃木短期大学、国学
院・久我山・栃木といった系
列、関係高校との連携も模索
していく。

多様な価値観。 その対立を解決できる人材に

現代はグローバル化が進み、さまざまな人々の多様な価値観が混ざり合っている。その中で法学部が目指すのは、多様な価値観から生まれる対立を解決できる人材の育成だ。それも主體的に問題と関わることを重視していく。

主體的とは、自分で積極的に議論に参加し、議論をまとめようとして、相手の意見に足りない部分があると感じたら指摘し反論するなどの行動をとることだ。そのためには、自分の価値観や考え方にとらわれるのではなく、相手の価値観や考え方を理解しつつ、それとの共存を図ることのできる柔軟な思考が重要に

なってくる。

こういった「対立の解決」の能力は、決して専門職だけに必要なものではない。対立や紛争は社会や日常の至るところに広がっているからだ。地域での対立、企業での対立、組織での対立もある。近年では、家庭内においても、対等に意見を表明し、議論す

対立を主體的に解決するために 提供する学問

価値観の対立を主體的に解決できる人材を育成するた

ることの重要性が注目されている。そうした対立を主體的に解決することができる人材は、地域でも企業でも社会でも求められているだろう。自分が持っている常識にとらわれることなく、相手の見解を理解しながら、公平な第三者の視点に立った解決策を提示することが必要となる。その点、本学部は法や政治の「知識を学ぶだけ」の教育をしようとは考えていない。知識の先にある判断力を磨くことを大切にしている。

議論や学生との対話を取り入れたアクティブ・ラーニングの授業を早くから取り入れてきた。これからもこの方針を続けていく。

昨今、アクティブ・ラーニングを取り入れる大学は増えているが、本学部がこの方針を明確に打ち出したのは15年ほど前だ。学生の主體的な参加を中心とする講義形態をいち早く導入してきたといえ

る。対立を主體的に解決する能力を身につけるには、学生自身が中心となって、議論や対話を重ねることが必要だ。実際に議論に参加してみると、それぞれがいかに違う価値観を持っているかを痛感することになる。その経験をする中で、多様な価値観が世の中に存在することを学んでいくのが狙いだ。

コロナ禍ではオンライン授業が主流となり、議論によって合意形成するプロセスを学ぶのが難しい面もあった。合意を作るには参加者が集まる「場」が重要だからだ。政治哲学では「共通感覚」というのが、同じところに「緒に在る」という感覚こそが議論と合意の背景にある。SNSの議論が論争になりやすいのは共通感覚がないからといえるが、その点で、対面型授業の拡大はプラスに働くだろう。

また、オンライン授業でも、教員のさまざまな工夫により、巧みに「場」を作り出して、学生の主體的な参加を促す講義が行われている。さらに、学生がオンライン上で自主的に討論できる「ラーニング・コモンズ・システム」の構築も計画している。今後も、こうした学生が主體的に

とだ。

日本の法制史や政治思想を学ぶ目的は、日本の制度や思想を絶対視するためではなく、そのメリットとデメリットの両面を理解するためである。日本で培われてきた方法を、歴史の視点から相対化し、一つの選択肢として適切に使えるようにする。それが「グローバル思考」の意味であり、そこにこそ、日本の法制史や政治思想を学ぶ価値がある。

価値観の対立する人々の合意は、妥協とは違うものだ。お互いの利益や意見を足して2で割るのではなく、第三者の視点で公平に分析し、適切な手法を使い分けながら、より公正な解決の道筋を考えていく。私が学部長として目指すのは、そういった人材の育成だ。

法学部

Faculty of Law

令和5年度から新たに法学部を率いることとなった菊田真司学部長。菊田学部長は、同学部で学んだことは、法律や政治に直接関係する職業以外にも社会のさまざまな場面で活用できると考える。同学部が目指す教育について詳しく聞いた。

育てたいのは、 知識の先にある 判断力



法学部長・菊田真司

学部 学長に 聞く

それぞれの学部が
目指す未来①

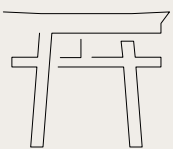


神道文化学部

Faculty of Shinto Studies

令和5年度より神道文化学部の舵を取ることになった黒崎浩行学部長。「過疎化やグローバル化の中で、神道を取り巻く社会環境は大きく変化している」と語る黒崎学部長は、本学部としてどんな研究と教育を目指すのか。描くプランを聞いた。

変動する 社会の中で 考える



神道文化学部長・黒崎浩行

くろさき・ひろゆき
平成元年東京大学文学部卒業。4年同大学院人文科学研究所修士課程修了。9年国学院大学日本文化研究所専任講師、15年同神道文化学部専任講師、19年准教授、27年教授。博士（宗教学）。専門は宗教学、宗教社会学、地域社会と神社神道、宗教と情報・コミュニケーション。

厳しい現実の中でも 神道を伝承していく

神社を取り巻く環境については、厳しい現実を目にしなければならぬ。町自体の都市化や地方の人口減少により、神社の基盤となる地域コミュニティの解体が起きているためだ。地域のお祭りや神事が担い手不足により続けられないケースが多くなった。しかし、これらの伝統を絶やしてはいけない。本学部はこれまで通り、神道や日本文化を次世代へ伝承することが使命だ。

神道の情報や知識は、今やインターネットで手軽に得ることができる。しかし、その中には根拠の不明な情報や正確性を欠いた情報があるのも事実だ。だからこそ、専門性と学術性を備えた本学部の研

「多様性」と 「世界の宗教文化理解」を重視

近年特に重要な社会的テーマとなっているのが「多様性の尊重」だ。本学では令和4年度より「中期5カ年計画」がスタートしたが、本学部ではこの5カ年において「多様性と神道」に関する研究教育を推進しようと考えている。神道精神は多様性の尊重に通じる一方で、それに逆行する面をはらんでいるためだ。

例えば祭りの中には、伝統的に参加者の条件が限定されているケースがある。神輿は長男しか担げない、地域住民しか参加できないといったことは珍しくない。また、グローバル化の中で神道が「日本人の優越性」の強調に使われるケースも見られる。日本人の根本に神道精神があるのは間違いないが、それにより優

越性を強調するのは、排他性に繋がりがかねない。これらは一例だが、複雑な現代社会の多様性に対して神道がどのような態度を取るかは重要な課題になっている。この問題に対し、受け身ではなく能動的に、主体性を保持した態度を取ることが大切だ。本学の建学精神でもある「寛容性と謙虚さ」を現代でも明らかにするため、まずは多様性と神道に関する教育・研究の基盤を構築し、教員各自がそれぞれの担当分野で行動していく。また、学術団体や神社界の研究機関など、学外との連携協力も強くする。もう一つ力を入れたいの

は、世界の宗教文化に関する教育研究だ。近年はグローバル化により多様な宗教が日本に入っている。相手の宗教の知識を持つべきであり、互いの宗教に対する尊重の念が必要だ。また、今も宗教による国際対立や被害は後を絶たない。そこでこの社会的テーマに繋がる学問を究めていく。もともと本学部は、神職養成や日本の宗教文化のみならず、世界の宗教文化も研究・教育してきた。例として、学生は3年次になると個々の関心に合わせて「神道文化コース」と「宗教文化コース」のどちらかを選択する。神道文化コースは神職に向けた教養を身につけるコースだが、宗教文化コースは内外の宗教文化を比較研究するもの。神道に限らずさまざまな宗教を学んでいく。

この分野に関する教員も充実しており、本学部が開設された平成14年、本学の研究機関である「日本文化研究所（現・研究開発推進機構）」から、世界の宗教文化を研究する教員が複数名移籍して体制を強化にした。具体的な目標として、日本や世界の宗教文化を学んだ人に与えられる「宗教文化士」の資格保有者を本学部から年間50人程度を輩出したいと考えている。この資格は宗教文化教育推進センターが認定するもので、現代の多文化社会で活躍できる人材に与えられる資格と認知されている。このようにして、日本や世界の宗教文化を専門的に研究し、教育への反映を重ねながら、社会で活躍する人材を輩出していく。最近ではポップカルチャーなどから宗教や神道に興味を持つ学生もいる。そういった学生も、本学を卒業する「出口」では、確かな宗教リテラシーを身につけた人へと成長させていきたい。

歓迎会に集まった学生たち



国学院大学で学ぶ留学生と日本人学生らの学内国際交流イベント「International Coffee Hour（コーヒアワー）」が留学生の歓迎会として4月14日に渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催され、約100人が交流を深めた。

初めに田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）が「世の中が分断の方向に進んでいる中、こうして参加してくれた皆さんは国際交流の大切さを知っている人たちだと思い、とても頼もしく感じている。これからの世の中を少しでも平和な方向に進めるきっかけになってくれたら」と学生たちを歓迎した。

続いて今年から留学を開始するK―STEP科目等履修生、学部留学生、大学院交換留学生がそれぞれ日本語であいさつし、参加した学生たちから歓声と盛大な拍手が送られた。

その後は「I know a person who...（私はこんな人を見つけた）（私はこんな人を見つけた）と題し、配布された用紙に書いてある趣味や特技などの項目に当てはまる人を探す

ゲームが行われた。「四川料理が好き」「韓国ドラマを見ている」など留学生の出身地に関する項目もあり、お互いに質問しながら交流を楽しんでいた。

参加した学生は「言語が通じ合わなくても、コミュニケーションをとることができたので、楽しかった」と話してくれた。

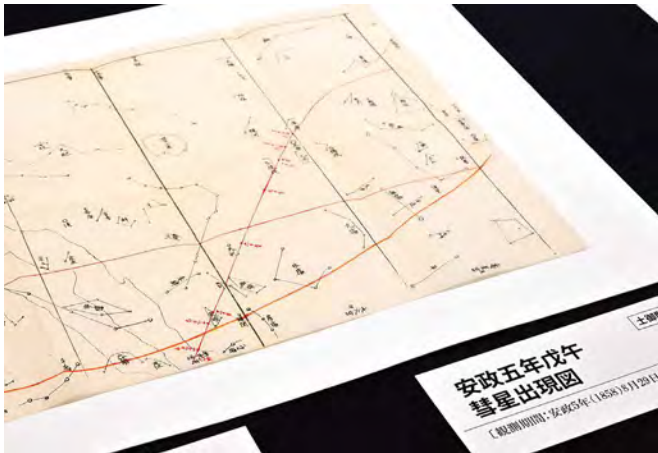
最後に岩瀬由佳・文学部教授（前国際交流推進部長）が「この機会にたくさん友達を作ってくれたらうれしい」と閉会のあいさつをし、今後の学生同士の交流に期待を寄せた。

同イベントは今後、毎週金曜日に開催される予定。



項目に当てはまる参加者を探すゲームを行った

学内交流企画 留学生15人を歓迎



超える史料群「土御門家記録」を中心に展示。なかでも嘉永6（1853）年のクリンカーフューズ彗星と安政5（1858）年のドナティ彗星の観測記録「写真」は、詳細な測量記録や絵図に加え、幕府への報告書である勘文の作成過程や彗星出現に関する土御門家の解釈などがわかる貴重なもの。彗星の観測日ごとの高度や「尾」の長さ、周囲の天体との位置関係や、観測から判明した軌道などが朱色で表されており、土御門家の天文観測の精密さがうかがえた。

ほかにも、古代・中世の天文観測記録として、国内で最古のオーロラの出現記録とされる『日本書紀』なども展示。来館者は興味深く展示を觀賞し、先人たちの見た星々の姿に思いを馳せていた。

国学院大学博物館が4月1日から5月14日までの期間で「春の特別列品―国学院大学図書館の名品―土御門家がみた宇宙―江戸時代の天文観測」を開催した。

今回の展示は、陰陽師・安倍晴明を受け継ぐ支流の一つで、時の朝廷や幕府に陰陽家として天文道をもつて仕えた土御門家の史料を公開。本学図書館所蔵の60点を

春の特別列品 土御門家の天文観測に迫る

町田樹助教 ミズノスポーツライター賞受賞

町田樹・人間開発学部助教が、第33回ミズノスポーツライター賞で最優秀賞を受賞し、4月20日に都内ホテルで表彰式が行われた。

同賞は、公益財団法人ミズノスポーツ振興財団が実施。スポーツ文化の発展と飛躍のため、スポーツに関する報道や論評、ノンフィクション作品などを対象に優れた作品と著者を顕彰するもの。

町田助教は表彰式で「受賞を励みに、教員として学生とともに研究を積み重ね、今後も書き綴っていきたい」と抱負を述べた。

たまプラーザキャンパス学食 「万葉の小径」リニューアル



たまプラーザキャンパス2号館の学食「カフェラウンジ 万葉の小径」が5月8日に設備を刷新しリニューアルオープンした。

オープン記念として8日から10日には、期間限定のおかず増量メニューも登場。オープン初日から、多くの学生が訪れ賑わいをみせていた。テイクアウトメニューも設けられ、中庭に設けられたベンチで友人と語り合いながらランチを楽しむ学生の姿も見受けられた。

同店では、在学生保証人（父母ら）で組織する若木育成会の支援により、本学学生に限り一般価格から200～250円引きで食事が楽しめる。

若木育成会 本部役員会・総会を開催

在学生の保証人（父母ら）で組織される若木育成会（森伸一会長）は4月22日、渋谷キャンパスで本部役員会を開催した。会議では、令和4年度の事業報告、決算や5年度の事業計画や予算などが審議・承認された。

本部総会は5月13日に渋谷キャンパスで開催され、本部役員に加え全国56支部の支部長が集い事業計画の審議などが行われた。参加者は各支部で実施している会員間交流の取り組みをはじめとした活動について情報交換を行うなど積極的に交流し、会場は活気を呈していた。

【お詫びと訂正】
国学院大学学報722号5面「学部・大学院 休学制度改正」記事における新

旧対照表の一部について誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、次のとおり訂正いたします。

訂正記事は印刷版紙面でのみ掲載しています

臆病だった自分を 成長させてくれた ファシリテーター& アドバイザーの経験は宝物

森こまちさん（令5卒・131期経ネ）

この春、経済学部経済ネットワーク学科を卒業した森こまちさんは、2年生からF A（ファシリテーター&アドバイザー）として下級生が授業でうまく議論ができるよう、導き役として活動してきた。F Aの活動を通じて森さんが経験し得たものとは何か話を聞いた。

新しい挑戦ができない自分を 変えたくて

経済学部で取り入れられているアクティブ・ラーニング（教員と学生が双方向に論じ、自ら考える思考法を養う能動的な学修）には「ファシリテーター&アドバイザー（F A）」が配置されている授業がある。F Aは主に、グループワークの際に議論を活性化させる種をまいたり、学生の発言を促したり、議論が迷走したときに道筋を示したりする。

議論が行き詰まったグループがあればF Aの出番。「どこまで話が進んだかな」と問いかけ、「ここから先が分からない」という返答がきたら、一人一人の意見を促したり、その意見について別の学生からの意見を引き出していったりする。この役割を、1年次後期にリーダーシップについて学ぶ授業を履修した2年生で、立候補した中から選抜された20～25人ほどが担っている。森さんは熱心に活動した結果、F Aのリーダーを任せられ、4年生の前半まで活動が続けてきた。

「私は臆病な性格で自ら立候補するタイプではなかったんです。でも、1年生のときF Aで参加していた先輩から勧められて、自分を変えたい、成長したいという思いで立候補したんです。それと、入学して大学に慣れてくると授業とサークル（野球サークル）とアルバイトの繰り返しに飽きちゃって。せっかくならこの大学でしか経験できないことをしてみようと思ったんです」

F Aデビューがなんとオンライン！

F Aに選ばれた後、研修を経ていよいよデビューが近づいてきた。森さんも授業に備え意欲を燃やしていたとき、思いもよらない事態が待っていた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、なんと授業が全てオンラインになってしまったのだ。F Aの事前研修は対面授業を前提にしたものだった。

「正直困りました！ でもやるしかない。まず先生方も含めF Aメンバー全体でZoomの使い方を学ぶところからスタートです。授業中に起こりうるトラブルも想定して、もう大忙しで準備をして本番に備えました」

やってみると想定外の事態も続出。グループワークは、Zoomのルーム機能を使って3～4人ごとに分かれてディスカッションするのだが、ルームに入室して議論を見守ろうとすると、入室した瞬間、1年生たちに「来た！」という目には見えない空気が流れ、議論がピタッと止まってしまうことがあった。止まった議論を促すために質問を試みたり、議論が止まらないようにルームへの入室の仕方を変えたりと、対応に頭を悩ませながらも試行錯誤を重ねた。

そうした事態への対応もあるので大変さもちろんあるが、F Aの活動をしてよかった！ と思うのは、下級生の成長を感じられたときだ。

「最初の授業で行った自己紹介で、緊張してほとんど話せなかった学生がいたんです。でも、年度が終わるころ、その学生が自分の主張を流ちょうに語れるようになっていて『うわあ、成長したな！』と感激しましたね。やっぱり、下級生の成長を目の当たりにすると感動します。やっていてよかったな、と」

先生とも二人三脚で取り組んだ 2年半

先生との連携も重要だ。「F Aは先生がどんな授業にしていきたいかを理解して活動しなければなりません。そのために毎回、打ち合わせをし

ました。私はずっと辻和洋助教とタッグを組んでいたのですが、先生から徹底的に教えられたのは『必ず振り返りを行う』こと。『何をして、結果どうなったか、きちんと振り返りを行って記録しておく』こと。それが蓄積されて成長に繋がるからという先生の言葉を信じて、授業後にはF A間で運用している掲示板に記入して情報を共有しましたし、自分自身でもノートに細かく記したりしていました」

そうやって見せてくれたノートは、年が変わるごとに分厚くなっている＝写真左下。そこには、携わった学生のことだけではなく、森さん自身の成長も刻まれているのだ。

困っている人がいたらなんでも 手を貸したい

森さんは、「学生生活の多くをF A活動に費やした」という。大学生は年度が上がるごとにゼミや卒業論文などで多忙になっていくから、時間捻出は大変だったはず。なぜ、F Aを続けられたのだろうか。

「私は困っている人がいたら手を貸すのが当たり前の環境で育ちました。出身地では人と人が支え合うのは当たり前なんです。自分では当たり前過ぎて、助けるという意識ではなかったかもしれません。ただ困っていたら手を貸すだけ。だからF Aの活動は自然なことでしたし、とてもやりがいがありました」

その結果、自分自身も大きく成長できた。「自分の強みも分かりましたし、挑戦することが怖くなくなりました。失敗することが怖くなくなったのは大きいですね」。充実した大学生生活は体中からあふれている。高校時代の先輩に久しぶりに会ったとき、「こまちちゃん変わったね。すごくキラキラしてるよ」と言われたことがとってもうれしかったという。

F Aの経験を生かしたいと、卒業後は人材開発や組織開発に関する仕事に就くことを選んだ。まっすぐな思いで駆け抜けた4年間。次のステージでもキラキラな瞳を持ち続けたまま活躍してほしい。





「学校が楽しい！」 子どもたちに そう思ってもらえる 先生になりたい

久保田結菜さん（令5卒・131期初教）

令和5年3月に人間開発学部初等教育学科を卒業した久保田結菜さん。4月からは長年の夢をかなえ、小学校教員としてスタートを切った。久保田さんは在学中にさまざまなボランティアや学内活動に参加し、経験を糧として成長してきた。ボランティア活動から何を学び、得たのだろうか。

ボランティア、学内活動に まい進した大学生活

「小学校の先生になるのが夢でした。大学に入学してからは、先生になるために役立つようなボランティアや学内活動には多く参加してきましたね」

そう語る久保田さん。経験したのは「米国初等教育T A（ティーチングアシスタント）研修」、人間開発学部教育実践総合センターの「教育ボランティア」。同学部の「学生企画委員会」や学内のワークスタディ活動として「学生アドバイザー」の活動にも力を入れてきた。

「ボランティアではアメリカと国内の小学校で、子どもたちとふれあいながら授業のアシスタントをしました。国は違っても、子どもたちと過ごすのは楽しかったですね。国による授業や習慣の違いや、子どもたちとの距離の縮め方など、今後の役に立ちそうな経験もたくさんできました」

小学校の現場とはまた違う経験で久保田さんを成長させてくれたのは「学生企画委員会」だ。これは人間開発学部の学生会員を代表する学生企画委員が組織する会で、毎年10月に開催している「共育フェスティバル」（地域の子どもたちへ体験や学びの機会を提供し、学生も学部での学びを実践する教育イベント）の運営などを行うもの。久保田さんは3年生のときに学生企画委員代表となり令和3年度と同フェスティバルを取り仕切るようになった。

「コロナ禍での開催で、令和2年度はフェスティバル自体が中止。コロナ禍前に開催された頃の話先輩に聞いても、コロナ以前とでは人の流れも異なり、初めて準備しなければならないことも多くて大変でした」

初等教育学科の代表の久保田さんのほか、健康体育学科と子ども支援学科にも1人ずつ代表がいた。3人はZoomで毎晩のように深夜まで話し合いを続けた。

「真夜中に『うん、じゃあそうしよう。資料をまとめて明日先生に提出するね』と決まってホッとしたのもつかの間、先生に見せたらNGが出てま

た会議……。そんなことを繰り返していましたね」

同フェスティバルのイベント企画は、学部の3学科やサークルが考え担当する。各企画担当とのやり取りも代表の役割で、コロナの感染状況もありギリギリまで決定できないことが多く、調整も相当ハードだった。

「みんなギリギリのスケジュールでやりくりしているので、どうしてもピリピリしてしまいます。ちょっとした行き違いで『えっ、どうして！？』みたいなやりとりも発生して頭を抱えたこともありました。でも先生が『小学校の先生になったら、もっといろいろな人と関わっていくわけだから、これも人間関係の練習だと思って頑張ってみたら』とアドバイスしてくださって、気を取り直して頑張りました。そうすることで、少し成長できたかなと思っています」

経験を生かして先生として 頑張りたい

久保田さんは昨年、教員採用試験に見事合格を果たした。

「とても楽しみです。小学校の先生になりたかった理由は、自分自身の小学校生活が本当に楽しかったからです。たとえば運動会で応援団の団長になって、応援賞をいただいたこともありました。それも私がみんなと一つになって、何かをやり遂げることが大好きだったり、声が大きかったり（笑）する様子を見て、先生が『応援団やってみたら？』と勧めてくださったことがきっかけでした。この体験を通して自信もついたり、協力してものごとを成し遂げる楽しさにも気付かされました」

そして、ボランティアを経験したからこそその反省点もある。

「私はこれまで、どちらかというとリーダー的な役割をすることが多くて、何かするときには段取りなどを自分の中できっちり考えてから『こうやっていくからよろしくね』と周囲に行動を促すようなところがあるんです。今振り返ると、そんなに



全部自分で決めないで、周りのみんなともっと協力して、一緒に考えていけばよかったと反省しています。今、小学校では子どもの主体性を育てる教育がメインですが、これまでの自分だと『こうやったほうがいいんじゃない』なんてアドバイスしてしまいそうな気がしているんです。子どもが自ら考えて動くようにどうやってサポートしていったらいいか、考えています。これは、ボランティアをしたからこそ気がついたことですね」

久保田さんはどんな先生になりたいのだろうか？「かつての私がそうだったように、子どもたちに『学校に行きたい！』って思ってもらえるような環境を作りたいですね。そのためには、私自身がいつも笑顔で子どもと接するようにしたいです！」

最後に、学生生活を振り返ってもらった。「大学ではものすごくたくさんの友だちと出会えました。一緒にアメリカに行った友だちや、教職を目指してともに勉強した友だち、ゼミやZoomで仲良くなった友だち……。キャンパスも学科の授業で集う建物はまとまっていたので、先生方との距離も近いし友だちとも仲良くなりやすく、学科では知らない子がいないぐらいみんなと親しくなれました。本当に居心地のいい場所でした」

笑顔で答えてくれた久保田さん。今頃は、赴任先となった学校で、子どもたちに向けてピカピカな笑顔をみせ元気いっぱい活躍しているに違いない。

柔道部

ジュニア国際大会 羽田野選手・ 後藤選手が優勝

フランスジュニア国際大会が5月6、7日にパリで開催され、国学院大学柔道部から男子66kg級で羽田野啓太選手（健体3）、同73kg級で後藤颯太選手（同2）が日本代表として出場し、それぞれ見事に優勝を飾った。

この大会は、各国から将来のシニア代表候補と目される選手が集い開催されている。男子部門には20カ国から218人が参加した。

羽田野選手は予選リーグの1回戦から4回戦までの4試合中3試合で一本を奪う好調さで準決勝へ進出。準決勝でもアゼルバイジャン代表選手に小内刈で技有を奪い優勢勝ちで制した。決勝戦では地元フランスの代表選手と対戦。優勝を懸け2選手が激しい争いを繰り広げると試合は延長戦へ突入。両者一步も引かずに進む中、羽田野選手が一瞬の機会を逃さずに一本背負投を仕掛けると相手選手は宙に舞い、見事に勝負を決めた。

後藤選手は1回戦シードとなり2回戦から登

場。2回戦を技有の優勢勝ち、3回戦を小外刈の一本、4回戦を横四方固の一本で突破した。準決勝ではフランス代表選手と対戦。両者が技を仕掛け合うなか、後藤選手が相手選手の腕を抱えるとそのまま肩固を決め、技有で優勢勝ち。臨んだ決勝ではカナダ代表選手とつば競り合いを繰り広げる中、隙をつき相手選手の背後を取ると送襟絞へ持ち込む。そのまま相手選手を制して一本を奪い、優勝に輝いた。

大会後、羽田野選手は「国内大会と違う緊張感の中で優勝を果たせ良かった。今後の大会も結果を出していきたい」、後藤選手は「日本代表という重圧もあったが勝つことができた。課題もあったので、さらに精進したい」と振り返った。本大会の日本代表男子監督を務めた川上智弘・本学柔道部コーチは「2人の優勝は部員たちに大きな刺激、好影響を与えた。この勢いで今後の試合シーズンに全員で臨みたい」とエールを送った。



男子66kg級を制した羽田野選手(左から2人目・柔道部提供)



男子73kg級を制した後藤選手(左から2人目・同)

陸上部

関東インカレ 5選手が入賞

第102回関東学生陸上競技対校選手権大会が5月11日から14日にかけて、相模原ギオンスタジアム（神奈川県）で行われ、男子2部に所属する国学院大学陸上競技部からは5選手が入賞を果たした。

12日に行われた1500m決勝には鈴木景仁選手（初教4）が出場。鈴木選手は序盤から3番手に位置し、積極的なレースを見せる。残り1周からスパート合戦となるなか、先頭争いを繰り広げた鈴木選手は3分50秒70で3位。本学陸上競技部で初めて同種目の表彰台に立った。

14日のハーフマラソン決勝では高山豪起選手（法2）が1時間4分10秒で7位入賞。最後の直線でも3選手が6位争いを繰り広げるなか、粘りの走りを見せた。110mハードル決勝では田中遼仁選手（健体4）が14秒64で8位と2年連続入賞。3000m障害決勝でも原秀寿選手（健体3）が9分4秒84で8位となった。5000m決勝では青木瑠郁選手（健体2）が13分59秒41で5位となった。ペースの変動が激しいなか、青木選手は3000m過ぎから順位を上げ冷静に対応。残り1000mからの激しい上位争いでも果敢な走りを見せ、日本人選手3番手でゴールした。



1500m 3位の鈴木選手(©月刊陸上競技)

硬式野球部

4位で終盤戦へ



東都大学野球1部春季リーグは第4週を迎え、国学院大学硬式野球部は5月17日時点で4位となっている。

第2週では亜細亜大学との対戦に臨み、4月19日の第1戦は0－1で敗れた。27日の第2戦では一回表に1－0と先制し、四回裏には2死一・二塁から神山福生選手（経営4）の左適時打などで3点を加え4－0とする。五回表に2点を返されたものの、坂口翔颯投手（経営3）が追撃を断ち4－2で勝利した。

第3週は、駒沢大学と対決。5月1日の第1戦は2－3と敗れた。2日の第2戦では2－0で迎えた八回裏、吉川育真選手（経4）の2ラン本塁打などで突き放し5－0で勝利。武内夏暉投手（健体4＝写真）が完投し11奪三振の力投を見せた。3日の第3戦は1－2で迎えた六回裏、打線が繋がり3点を加え逆転。最後は4－3で勝利した。

第4週では首位の青山学院大学と対戦。11日の第1戦は3－4、17日の第2戦は1－10と敗れた。同部は第6週で中央大学との対戦に臨む。